

理想と現実の彼方にある倫理 ——サルトル『文学とは何か』における承認論の意義

赤阪 辰太郎

ジャン=ポール・サルトルの他者にかんする思想は、『存在と無』（1943年）の「まなざし」論の強い印象から、しばしば相互対象化的な相剋の他者論として特徴づけられる。しかし、1948年頃に執筆された『倫理学ノート』（1983年）の死後出版以来、同時期の公刊著作である『文学とは何か』（1948年）のなかに、他者との相互承認を軸とした倫理学の具体的な構想を読みとる研究が新たに進められてきた¹⁾。

それらの研究には、文学を介した作家・読者間の相互承認の内容面における解明を主題とするものが多く、サルトルの理論構成のなかで承認論が占める特異な役割に言及するものは限定的である²⁾。本稿の目的は、主として『文学とは何か』第二章で展開される作家と読者の承認論について、その理論的な役割を解明することにある。その際、とりわけサルトル自身が承認的關係を「理想的」（QL75）と称する点に着目する³⁾。この表現はしばしばサルトルの文学観の楽観主義的、ユートピア的傾向をあらわすものとして理解されてきた⁴⁾。しかし、本稿の主張によれば、相互承認にかかわる理想についての記述は、作家と読者にとって所与の現実でも、即時実現を期待されるものでもなく、その実現不可能性を読者に体験させることで後の行為に一定の方向づけを与えるために導入されるものである。以上のような承認論の独自の位置を解明することで、「モラルと歴史とのアンチノミーの向こうに垣間見える」とされるサルトルの「具体的モラル」（CM111）の構想について理解するための重要な示唆が与えられるだろう。とはいえ、内容上多岐にわたるサルトルの倫理学について、限られた紙幅でその全体を詳論することはできない。本稿では「理想的」と称される承認についての記述が、現実的な執筆・読書行為とのあいだに齟齬をきたす場面に焦点を当て、その齟齬をサルトルがいかに処理するか注目する。この作業の成果として、『文学とは何か』の承認論がもつ実践的かつ倫理的な意義が示されるだろう。

1. 読解の方針

『文学とは何か』は作家の社会参加について論じた実践的文学論である。同書は言語使用のあり方に注目し参加に適した表現形式を探る文学類型論（第一章）、文学作品を媒介とした作家・読者の相互承認を論じる承認論（第二章）、社会のなかで作家が占めてきた地位に注目した文学史的考察（第三章）、現代において作家が果たすべき仕事を提示する状況論（第四章）から成る。

Heterは承認論を同書全体のなかで次のように位置づける⁵⁾。文学空間において作家と読者という立場を異にした主体は互いの自由を認めあう。この事態は第四章で展開される、来るべき社会の「モデル」としての役割を果たす。そして、文学空間において成立している人間関係を現実社会の

なかに実装することこそがサルトルの文学論の狙いとされる。Heterの解釈は、相互承認が文学空間という特殊な場において事実上成立する点をサルトルの議論のなかに読みとるものである。また、澤田の研究は、承認の存立根拠を作品という媒体による他者関係の間接化のなかに見出すものだとと言えるだろう。澤田は『倫理学ノート』を論拠に、作品という媒体のなかに相剋を解除し、承認を実現する役割を見出す⁶⁾。このとき、文学空間に参入する読者ないし作家は、文学作品のもたらず間接性ゆえに、他者のまなざしに怯えることなく相手の自由を認めることが可能となる。

しかし、澤田自身が述べるように、「サルトルが提唱するような対象化や異化ではない了解の理論的根拠はどこにあるのかという疑問も依然として残る」⁷⁾。また、サルトルは言語的媒体を介した他者関係のなかに相剋が見出される事実について複数回言及している⁸⁾。このことから明白であるように、言語的媒体を通じた交流において他者とのあいだに消しがたい非対称性が生じうることが否定できない⁹⁾。以上のことから、承認にかんする記述は、文学を介して交流する者たちが必ず到達する人間関係を描いたものではなく、別様に解釈されるべきものだと考えられる。

上記のことがらを踏まえるならば、われわれは次の二点を前提すべきだろう。第一に、作品という媒体的事物を介した間接的他人関係は、理想と称される承認的關係と独立のものであり、両者のあいだには無視しがたい溝がある。そして第二に、文学空間における作家-読者間の相互承認は所与の現実ではない。さらに、この二点を前提したとき、次の二つのことに答えられなければならない。承認關係の事実上の実現を疑問に付すのであれば、①理想的だとされる承認關係とは何を意味するか。そして、②相互承認が文学空間においてすら所与の現実ではないとすれば、それについてサルトルが論じるのはなぜか。以下では、まず前者の疑問について『文学とは何か』第二章の議論を中心に現実的な執筆・読書行為の構造を再構成し、それと対比することから解答する。続いて、現実的な行為の水準との比較を通じて承認の意味を確定させた上で、それが論じられる理由を明らかにする。以上の行程により、サルトルの文学論のなかで承認論の担う役割が明らかにされる。

2. 作家 - 読者のすれ違い構造——間接的他人関係の再構成

本節では、主として『文学とは何か』第二章の議論に依拠しながら、執筆および読書行為の構造をそれぞれ再構成する。この作業は、換言すれば「直接的ではない」他人関係の再構成である。われわれはとくに、具体的な行為の水準における作家にとっての読者と、読者にとっての作家に与えられる地位に着目する。上記の二つの行為にかかわる箇所を追うならば、承認論という見かけにもかわらず、作家-読者関係はすれ違いの構造をもつことが明らかとなるだろう。

2-1. 作家にとっての読者

『文学とは何か』の時期のサルトルによれば、作家にとっての作品とは、一言でいうならば言語という身体の延長を用いた行為の軌跡であり、世界の我有化の試みである。行為としての作品は作家にとって主観的なものにとどまり、客観性を獲得することを求めて他者による承認を、すなわち読者の承認を要請する。

a. 行為的性格——身体の延長としての作品

先行研究が示すとおり¹⁰⁾、『文学とは何か』の時期のサルトルは作家にとっての作品をある種の行為と捉える。その際、「[散文的] 言語は諸感覚の延長」(QL26)であると述べられ、「道具としての言語」(QL19)の側面が強調される。それだけでなく、言語は作家の状況を構成してもいる。「散文で語る人は言語のなかの状況にあり、言葉に包囲されている」(Ibid.)。こうして、言語のなかに定位し、書くこと、語ることを通じてなにかを投げかける散文的な表現行為は、状況に根ざした「投企projet」そのものである(QL28)。

『存在と無』においてサルトルは行為による対象の、また対象を通じた世界の我有化について論じたが(EN第4部第2章)、文学論にも同様の傾向を見てとることができる。「創造的行為の目的は、何らかの対象を生産ないし再生産することによる、世界の全面的な捉え直しである」(QL64)。作品制作が「世界を提出する」(QL70)と表現されることから明らかであるように、我有化的行為による世界への関与は、サルトルにとって世界への住み着き方の一つの型である。

b. 主観的性格——正当化の要請

作品制作を行為として規定したことの帰結として、作家の投企には強い主観的性格が与えられる。通常の身体的行為についての反省がしばしば客観性をもたないと同様、作家にとっての作品は世界内で出会われる事物のような客観性をもつことがない。このとき、作家にとっての作品は、それを認識することが自己認識でもあるようなある特異な対象として出会われる。これは言い換えれば、作品の経験が、〈作家としての私〉と〈作品に反映された私〉が等号で結ばれるような、抽象的な自同律に回収されることを意味する。この事態を端的に示す一節を引く。

こうして作家が自作のいたるところで会うのは、彼の知識、彼の意志、彼の投企であり、要するに彼自身である。作家はただ彼自身の主観性にだけ触れ、自分で創造する対象に到達するのは不可能だ。彼は主観的なものの限界まで赴くが、その限界を越えない […]。(QL49)

上の引用に見られるように、作家が作品のなかに「彼自身」しか見出せないとき、作品の受容は客観的事物に接するときのような発見的行為とはならない。そこに読者であれば会うことができるような未規定の「地平」や豊穡な「意味」を見出すことはできず、作家は自己の主観性という内在的な既知に触れるのみである。このように、作家は作品制作のなかで自身の主観性から抜け出すことはなく、超越なき自同性に陥ってしまう。それゆえ作家は、作品の客観的性格、言い換えれば対象あるいは超越としての側面が承認されることを求めて、「書くことの弁証法的相関者として」(QL50) 他者の読書行為による正当化を要請するのである。

ここで強調したいのは、客観化の要請として期待される他者は、日常的に出会われる経験的かつ具体的な他者だというよりもむしろ、作品を自由な読書行為によって読みとく誰でもよい誰かだということである。その意味で、この他者はさし向かいの対人関係をつくる相手だというより、作家とその作品が作る創造的関係の限界、言い換えれば作家の主観性の限界そのものを意味する。読者

の自由は書く行為の彼方に、書く者の主観性の限界において、いわば要請されるのである。

2-2. 読者にとっての作家

つづいて、読書行為を通じて作家がどのようなしかたであらわれるか、テキストにそって再構成しよう。概要を述べれば、読者は超越的対象としての作品の上に、読書の成熟度に応じた作品の意味を創造的に再構築する。読者が想定する作家とは、再構築された作品の意味の帰属先であり、作品を秩序だったものとして統一づける秩序の制作者を意味する。

a. 超越的対象としての作品から意味の構築へ

作家にとっての作品が自身の主観性そのものを意味した一方で、読者にとって書物ははじめから「厳密な意味で超越的なもの」(QL50)、つまり読者の主観性を超えたある種の質料体として存在する。読むことを通じて作品を展開し存立させつつ、読み手は作品のなかに、それを構成する意味作用 *significations* の看取をとおして入り込んでゆき、次第に作品全体の「意味 *sens*」(QL51) へと到達する。構築される意味は「いたるところにあるが、どこにもない。[...] それらすべて [= 個々の作品の意味] は決して所与のものではなく、読者が、書物をたえず超越しながら、発明しなければならないものである」(QL51-52)。ここでいう意味とは、命題的な指示とかかわる意味作用ではなく、作品全体を秩序だった統一体として総合的に把握するための鍵をなすものである。こうして、読者ははじめ個々の意味作用を通じて作品全体の意味へと到達するが、翻って今度は作品内の個別的要素の方が意味を中心に秩序づけられた世界として姿をあらわす (QL50-51)。

b. 秩序づけられた世界としての作品

サルトルは読者が出会う作品が地平的構造をもつと指摘する (QL51-52)。これは一方で文と文の連鎖、順序だって綴じられた書籍という作品の物理的形態の謂とも理解されうが、読書体験に内在的な仕方での指摘を理解することも可能だろう。意味を介して各部分が有機的に結び合わせられることで、作品全体はひとつの世界に比した構造をそなえる。読み手が準拠する作品内のゼロ点を基準とするならば、読み手にあらわれていない他の箇所との関係は顕在的領野と地平との関係に類比的である。

サルトルはさらに歩みを進め、作品を統一する秩序が作品そのものの有限性を超えて作品外へと広がることを「窓」にたとえながら説明する。「描かれた対象、あるいは彫刻された、あるいは物語られた対象は作品を限定しない。[...] 画家が野原や花瓶をあらわすとしても、そのタブローは全世界に開かれた窓だ。[...] われわれは、野原と大地の存在を支える深い合目的性 [作品内秩序] を、無限に向かって、世界の果てまで延長する」(QL63-64)。こうして、読者は作品が示唆する世界の所有の仕方を、意味の再創造によって発見する。

c. 秩序の帰属先としての作家

以上のように、読者は読むことを通じて作品内に秩序を発見し、その秩序にしたがって世界を眺

めるようになる。このとき、秩序が自然的因果性と別のものであることを読み手に告知するならば、その帰属先として、読者は自分とは別の自由な主体を想定するだろう。サルトルは読書行為の先に他者が見出されると考えるのだが、この発想を支えているのは上のような推論である。「読者が本のさまざまな部分のあいだに——章や言葉のあいだに——樹立する関係がどのようなものであれ、読者にはこうした関係が明らかに意図されたものだという保証がある」（QL60）。このように述べられるとき、作品の向こう側には読み手にとっての他者が想定されている。作品のもつ統一性が「決して偶然の結果ではないという大きな確信」を得た読者は、その秩序の根底に、自然的秩序とは異なるひとつの独立した秩序を構築する者の存在を、言い換えれば自由な制作者の存在を確信する。「原因の秩序の下に目的の秩序があるという確信をもつならば、それは本を開きながら、そこにある対象の源が、人間的自由であることを肯定するからである」（QL61）。ここで肯定される作品の源に見出されるものこそ、読者が読書行為を通じて出会う読者自身とは別の人間的自由、すなわち読むことを通じて発見される限りでの作家である。

ただし、読書行為を通じて出会われる作家のことを、現に作品を書いた作家本人とただちに同一視することはできない。先に述べた「意味」の構築について、サルトルは読み手の能力に応じた差異がありうることに言及するだけでなく（QL52）、この構築が読者による全く新たな創造である点を強調している（QL51）¹¹⁾。つまり、意味作用から意味へ、そして秩序の制作者としての作家へと至る一連の過程は、作家の意図の復元ではないのである。それどころか作家の制作時の意図とは「推量する他ない」（QL61）ものであり、「沈黙」（QL51）という「表現されないもの」（Ibid.）に属している¹²⁾。言い換えれば、作品を統一する極として構築される作家は、作品という共有物をもとに新たなものとして、読書のたびごとに創造される。この意味で、意味の多様化的側面を肯定するサルトルの読書論は、同一の文化的傾向性をもつ解釈共同体の強化や意図の復元を目指すような、忠実な読解という再認的モデルとは異なった狙いをもつと考えられる¹³⁾。

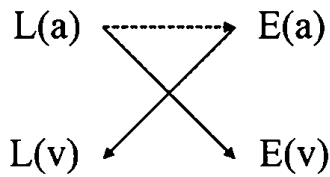
まとめよう。作家と読者はそれぞれ、制作と読書という別々の仕方で作品に向かうが、作家はその客観化の要請として、読者は作品の意味の帰属先として、それぞれの他者を見出す。両者の見出す他者は、双方異なる理由において自由であることが求められる。作家にとって読者の自由は作品の客観化の要請を成就させるための条件である。また読者の方では、ある超越的对象のなかに自然的因果性と別の秩序を見出すことにおいて、他なる主体の自由な投企を想定する。

2-3. 作家と読者のすれ違い

以上のことがらを別の角度から検討しよう。読者は作家の自由を、作品の読書を通じて発見する。しかしそれは作家を前にし、その声が読み手の耳に届けられているからではなく、時として読書が作品内に秩序の制作者たる作家の姿を想定させるからである。また、作家の自由が認められるのは書くそのときではなく、作品が読まれ、そのなかに作品を統一づける秩序として自由を認められたときだろう。言い換えれば、書いている作家にとって他者は期待の状態に留まる。

以上を踏まえれば、作品という共通の舞台を介して結ばれる関係が作家-読者間のすれ違いないし隔時性を示すことは明らかだろう。ここで、未だ期待の状態に留まる作家にとっての読者が「潜

在的公衆publique virtuel」(QL90) と呼ばれることをうけ、要請ないし想定としての他者を潜在的な他者と呼んだ上で現実的な他者と区別し、作家-読者関係を図式化しておこう¹⁴⁾。



書物を手にとり読み進める現実的な読者L (a) が読書を通じて向き合うのは、作品に潜在的に想定される作家の姿E (v) である。そして、現実的作家E (a) が作品を通じて要請する読者、つまり再創造という自由な行為を通じて作品を客観的なものとして承認する主体としての読者L (v) は、作家が制作行為のな

かにあるときには未だ潜在的である。既述のとおり、現実的な執筆行為、または読書行為は、各々の過程にしたがって作品の向こうに他者の自由を見出すのだった。しかし、行為者が自由として見出す他者と行為者の方にはたらきかける他者は、いわば作品という舞台の上ですれ違っている。

上記のすれ違い構造は、同時に、時間的な隔たりの関係をも意味している。作家の呼びかけに相当する執筆行為に対して応答があるのは、読者がそれを読むときである。そのため、作家の呼びかけは常に未来に向けた呼びかけである¹⁵⁾。また、意味の構築を通じて想定される作家は読み手の現在において構築されるが、作品を書いた作家その人は読み手にとっての過去に属する。そのため、読者は作家に必ず遅れをとる。このように、行為の水準に定位して作家-読者関係を評価するならば、作家と読者は常にすれ違う。

ただし、作品という共通の舞台の上で生じるこのすれ違いの構造は、『文学とは何か』が提示する文学空間の開放性の条件をなすという意味においてポジティブな効果をもたらす。来るべき読者が作家にとって期待の状態に留まるとき、作品の創造によって開かれる領野には新たな他者のための席が常に用意されている。また、読書行為に応じた意味の創造的再構築が肯定されるとき、作品の意味は執筆当時の意図に拘束されることなく多様になりうる。このように、潜在的他者を構造上取り込んだすれ違いのモデルには、文学空間への新たな他者の参入と、意味の多様性の産出という開放性が認められる。

3-1. 承認モデルの構造

次に、前節までの議論を踏まえ、冒頭で言及した理想的な承認のモデルが何を意味するかを明らかにしたい。まずはその内実をサルトル自身の記述に即して検討しよう。サルトルは作家と読者の承認関係について以下のように述べていた。

作家は、このように、読者の自由に向かって書き、読者にその作品を存在させることを要求する。しかし、それだけでなく、読者が与えられた信用を作家に返してくれることを要求し、作家の創造的自由を承認して、読者の側からのシンメトリックで逆向きの呼びかけによって、作家の側の自由を喚起してくれることを要求する。[...] 読者であるわれわれが、われわれ自身の自由を感じれば感じるほど、われわれは他者〔作家〕の自由を承認する。作家がわれわれに要求すればするほど、われわれは作家に要求するのである。(QL58)

サルトルが、書く行為と読む行為を、作品の背後に他者の自由を想定するはたらきとして提示したことは既に確認した。上の引用はその記述と連続的に導入されるが、自由の認識にかんして相互的性格が付与される点に、先述の構造との差異がある。ここでサルトルが語るのは、私の自由が認められれば認められるほど他者の自由が認められるという互恵的な循環構造、彼の言葉では「[作家と読者の] 各々が相手を信頼し、各々が相手をあてにし、相手が自分自身に要求するだけ相手に要求する」(QL62) ような関係である。このモデルによれば、私が自由な主体として他者を見出すとき、その他者が、私が見出したその分だけ私の自由を認めてくれることが実感される。ただし、相互性の導入が論理的前提なしに、いわば具体的な行為についての記述から単線的に接ぎ木するように行われる点には注意を促しておきたい。

以上の承認モデルを前節で提示したすれ違いの構造から説明しよう。上記の互恵的な相互承認は、作家が作品の彼方に要請する潜在的な他者L (v) と、現実の読書行為によって作家を創造的な自由として認める読者L (a) の同一性が認められるとき、さらに、読者が作品の根底に見出す作家E (v) と、実際にその作品を書いた作家E (a) の同一性が認められるとき、〈私が与えた分がその分だけ、与えた相手から返ってくる〉という仕方では実現される¹⁶⁾。先のすれ違い構造が時間的な隔たりをも示していたことを考慮すれば、作家にとって現実的読者と潜在的読者の同一性が認められ、読者にとっての潜在的作家と現実的作家が一致するには、両者の同時的現前が求められる。これがサルトルのテキストから取り出しうる相互承認の構造である。

3-2. 承認論の役割

本稿の冒頭で提示したように、われわれの仮説によれば、文学空間における承認関係は所与の現実として考えられるものではなかった。だとすれば、上で記述したこのモデルはいったいいかなる役割を担わされているのだろうか。それを確認するために、以下では社会的な文脈でこの理想が機能する場面を焦点化する。このことにより、承認論の実践的役割を解明したい。

まず、サルトルはこの理想の即時実現を目指すよう促しているのではない、という点を確認しておきたい。たしかに、相互承認のモデルでは、互いの自由が現実的な他者によって認められるという理想的な対人関係が実現する。しかしこれがただちに実現されるならば、次の理由から、先に指摘した文学空間の開放性と豊穡性は失われるはずである。まず、相互承認が潜在的他者と現実的他者の事実上の一致から与えられるとき、作家が読者に向けて行う呼びかけは、まさに彼の作品を現在読んでいる他者、つまり同時代のごく少数の読者を狙うものとなる。そのとき、来るべき無数の読者たちは作家によって期待されることがなく、作品の開放性は失われるだろう。さらに、読者の側から記述するならば、現に作品を書いた作家、さらに言えば作家が制作時に抱えていた意図へと収斂する読書が求められるため、意味の多産性は抑制され、読書は多様性を失った再認に過ぎないものとなる¹⁷⁾。

上記の事情にもかかわらず承認の即時実現を志向するならば、そこには別の危険性があらわれる。それは承認の即時実現への志向自体がもたらす、現実の把握にかんする誤った仮説の導入である。サルトルは17世紀の文学的実践を例に取りつつ、その点を批判的に指摘する。彼によれば、17世

紀の文学者たちはオネットムという作家と読者が等しく所属する社会集団の永続を通じて、承認関係が保証され続けることを望んだ。彼らは「無際限な未来に、現在作家が自由にすることのできる一握りの読者の無限反復を仮定した」(QL158)。同一者が無限に反復するならば、たしかに、既に文学空間に参入している人々にとっての承認は維持され続ける。だがこの想定は、推移性と不可逆性をその本質とするはずの歴史の反復と、〈人類＝人間性 *humanité*〉の外延にかんする極端な制限という、現実から乖離した二つの仮定を招来する。17世紀の文学者たちが依拠する理想をサルトルは「抽象的普遍性」(Ibid.)と呼び否定的な評価を下すが、この評価は、理想をそれ自体として選択する際にもたらされる、具体的現実からの乖離への警戒に由来するものであろう。別の箇所では「永遠的価値を急いで持ち出すことは危険なほど容易だ」(QL75)と述べられるが、この態度にもあらわれているように、理想の即時実現が承認論の真の狙いではないことは明白である。だとすれば尚のこと、次のことが問われねばならない。承認の理想が語られるのは何のためであり、実際の行為についての記述と理想的な承認はどのような関係をもつのか。

以上までのわれわれの記述が正しければ、承認は所与の現実ではなく、即時実現を求められるものでもない。しかし、だからといって承認にかんする記述は不要なものではない。これが本稿の立場である。われわれの意見では、承認論が同書に含まれることの意義は『文学とは何か』というテキストの実践に着目することで明らかになる。このことを、承認という理想的関係にかんする記述が同書の読者にもたらす効果に注目することで説明しよう。

われわれは先に理想的な承認関係についての記述が、文学にかかわる現実的な行為についての記述から単線的に接続されている点を指摘した。ここでのサルトルの記述は、一方で「要請する *exiger*」や「要求する *requérir*」という動詞とともに書かれることで、望ましいが実現されていないという意味での理想の未然的性格を保ちつつ、他方で「感じる *éprouver*」、「認める＝承認する *reconnaître*」という強いリアリティを喚起させる動詞とともに記され、あたかもそれが現に実現しているかのような虚構的效果を与える。このとき読者は、自分がテキストのなかに見出す自由としての作家の方から自身の自由を認められることを体験する。『文学とは何か』を手にとった読者自身が作家であれば、自作を客観化してくれる読者があたかも現に存在し、自らの創造的自由を認めてくれるかのような体験が得られるだろう。このように、『文学とは何か』の読者は自身の行為が承認へと続くものであるかのように、テキストが提示する虚構的な状況のなかで体験する。その意味でサルトルの実践はそれ自体、彼が文学に見出す「あるべき目的の都市ではないとしても、少なくともそれへと至るステップ」(QL68)としての意味をもつ。

ただし、サルトルの狙いは理想を夢見させることで読者を幻惑することにあるわけではない。彼はテキストの上で理想の成就を垣間見せながらも、同時に読者に現実を手放させることはないのである。サルトルは、テキストに没頭する読者がいつでも反省に至りうる点を指摘し、文章に身を委ねながら同時に現実を生きるという作品との距離感に目を向ける (QL56-57)。テキストに没入しつつそこから同時に距離をとるとき、読者は一方で承認のビジョンを手にしながらか、他方で承認の相手の不在という現実気づくだろう。こうして『文学とは何か』の読み手は、承認とすれ違いの、理想と現実の二項を同時に保持し、両者の緊張のあいだに身を置く。この効果は、承認論が上のよ

うな独自の仕方でも導入されることではじめて読み手に体験されるものである¹⁸⁾。

4. 結論

本稿がこれまで強調してきた承認の成立不可能性にもかかわらず、サルトルは社会の改善という文脈で読書の意義を論じる際に、文学空間において成立する、承認を軸とした理想的な共同体への到達を描いている。本稿を締めくくるにあたり、われわれの見解とサルトルの倫理学の構想との関係を示唆するために引用しよう。

読む人間はいわばその経験的人格の皮をはぎ、自己の自由の最高位に身を置くため、その怨恨、恐怖、渴望から免れることを想起しよう。[...] こうして読者は、読者自身の要請そのものによって、この大地のあらゆる地点で、あらゆる瞬間、互いに知り合わない無数の読者が維持するのに貢献するような善意志の一致に到達する。[...] しかし、この理想的一致が一つの具体的な社会となるためには以下の条件を満たすことが必要となるだろう [...]。(QL268)

以上の論述をそのままに受けとるならば、読者にとって相互承認は事実上実現しており、それを社会のなかに定着させることが課題なのだと言われているように見える。しかし、サルトル自身も述べるように、理想的関係のただなかに身を置くと、読者はいわば自身の経験の領野から離れ、個人の具体的生を宙吊りにする。このとき、ここに抽象的なものから具体的現実へと向き返るための契機がなければ、読者が社会の改善に向けた行為へと促されることは期待しがたい。本稿ではこれまで現実的行為と理想的承認のかかわりに注目してきたが、その試みはこの向き返りのいかにしてを説明するものであった。理想から現実への送り返しのきっかけを具体的に探求するとき、それは相互承認の破れが開示されるその地点に見出されるだろう。

与えられた理想のリアルな存続が困難であることが開示され、理想の実現不可能性というある種の欠如状態が体験される時、それは状況の変革に向けた推力となりうる。さらに、文学を通じて垣間見られる相互承認的な共同性は他者の自由を妨げない理想的なものでもあるため、それによって一定の方向づけを与えられた行為は倫理性を帯びることが期待される。このように、相互承認という理想の欠如の認知は、社会の変革に指針を与えるという意味で、実践的な価値をもつ。この点にわれわれは、『文学とは何か』の承認論の意義を見ることができる。以上のことから、同書の承認論はサルトルが歴史とモラルの、経験的所与と抽象的普遍性のアンチノミーの彼方に構想していた「具体的普遍」(QL160)としての倫理に寄与する、不可欠な要素であると考えられる。

注

*サルトルの著作略号（翻訳は既存訳を参照し、一部著者の責任で表現を改めた。）：CM=Cahiers pour une morale, Paris, Gallimard, 1983; EN = *L'être et le néant* (1943), Paris, Gallimard, coll. « tel », 1976; MA = *Les mots et autres écrits autobiographiques*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2010; QL= *Qu'est-ce que la littérature ?* (1948), Paris, Gallimard, coll. « Folio/ essais », 2008; Sit. I = *Situations, I*, Paris, Gallimard, 1947;

VE=*Vérité et existence*, Paris, Gallimard, coll. « NRF/ essais », 1989.

*本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（15J00848）の助成を受けた研究の一部である。

- 1) サルトルの第一の倫理学は本来性の回復と浄化的反省を軸とした側面と、他者の承認と疎外を扱う承認論的側面をもつことが知られるが、本稿は後者を主題とする。倫理学の構成については水野浩二、『サルトルの倫理思想』、法政大学出版局、2004、第一部第一章を参照。また本稿は倫理学との関係から『文学とは何か』を評価するため、同書の文学論的側面には論及しない。
- 2) HETER, T. Storm, "Authenticity and Others Sartre's Ethics of Recognition" in *Sartre Studies International*, vol. 12, Issue 2, 2006, pp. 17-43 は本稿と立場を異にするものの、承認論の「モデル」としての意義を主張する。承認関係の内実を扱う研究のなかで重要なものに澤田直、『〈呼びかけ〉の経験 サルトルのモラル論』、人文書院、2002がある。同書は『文学とは何か』の贈与論としての側面を取り上げ、無償性およびジェネロジテ概念の倫理的含意を解明する。
- 3) 承認論に続く第三章冒頭は次のようにはじまる。「誰のために書くか [章題]。一見したところ、疑いの余地はない。われわれは普遍的な読者のために書く。現に、われわれは作家の要求が原則としてあらゆる人間に向けられることを述べた。しかし先に述べたことは理想的 *idéales* である」(QL75)。文学的承認関係がつくる共同性は「目的の都市 *cité des fins*」(QL68, 268ff.) と呼ばれ、具体的な歴史のなかで実現されるべき理想として提示される。カントのいわゆる「目的の王国」との関係については永井玲衣、「サルトルにおける「目的の都市」」in 『上智哲学誌』第27号、2015年、pp. 83-93を参照。
- 4) ヴァルデンフェルスは理想的承認関係の「ユートピア」的性格を指摘し、成立根拠が不明瞭な「単なる言い逃れといった印象を与える」として強く批判する（ヴァルデンフェルス、ベルンハルト、『フランスの現象学』、佐藤真理人監訳、法政大学出版局、2009、pp. 114-115）。
- 5) Heter2006.
- 6) 参照されるのは以下の記述である。「他人への呼びかけ。どのように他人を考えるのか。[...] 他人と直接的関係をもつことを諦めること。他人との真の関係はけっして直接的ではない。すなわち作品を媒介とした関係」（CM487）。さらに澤田は次のように述べる。「『贈与によって三項関係が成立する。贈与する人と、贈与されるモノと、贈与を受ける人である』（CM382）。このような [作家 - 作品 - 読者の] 三項関係によって、サルトルは眼差しの理論に象徴される対立的、相剋的二項関係を逃れられると、考えたのではないだろうか」（澤田 2002, p. 120）。
- 7) 澤田 2002, p. 103.
- 8) 『戦中日記』では手紙という物理的媒体を通じた相互対象化的関係が主題化される（MA347-348）。また 1944 年のプリス・パラン論「行きと還り」では「語ることが他者のまなざしのもとで行為することならば、言語の有名な諸問題も、他者の存在にかんする存在論的な大問題の特殊領域に過ぎなくなるかもしれない」（Sit. I, 219）と述べられる。
- 9) つまり承認は「片務的に」なりうるものであり、「実際の呼びかけはリスクである」（CM294）。
- 10) 澤田 2002, p. 30.
- 11) MULTARIS, Paulin Kilol, *Désir sens et signification chez Sartre*, Paris, Harmattan, 1995, pp. 169-171 は読者による意味の創造的側面に着目し、詳細に分析している。

- 12) LÜBECKER, Nikolaj, "Sartre's Silence Limits of Recognition in *Why Write*" in *Sartre Studies International*, vol. 14, Issue 1, 2008, pp. 42-57 は作家の表現活動における言語化以前の沈黙と、読書行為によって構築される表現不可能な意味の沈黙が非対称である点に注目する。
- 13) COMPAGNON, Antoine, *Le démon de la théorie*, Paris, Seuil, 1998, 第4章の受容美学論を参照。
- 14) サルトルは同書で不在の他者へのコンタクトを想像としては論じず、潜在性や可能性の範疇に位置づける。ここではサルトルのイマージュ概念が表象的実現可能性と結びついており、期待状態にとどまる理念や目的とは区別される点を指摘するにとどめたい。
- 15) 1948年頃執筆された『真理と実存』では短文「時代のために書く」への反響を振り返り次のように書かれ、未来の読者に向けた文学空間の開放性が強調される。『『自らの時代のために書く』という表現を、自らの現在のために書くという意味であるかのように人々は理解した。だが、それは違う。それは具体的な未来のために [=へと向けて]、つまり各人それぞれの行為に対する恐れと可能性によって限定された未来のために書くことなのだ』(VE33)。サルトル文学論の未来世代に向けた開放性については澤田直「近代神話の裏面——サルトルにおける世代横断性」 in 『〈前衛〉とは何か？ 〈後衛〉とは何か？』, 塚本昌則ら編, 平凡社, 2010, pp. 120-137 が詳論している。
- 16) この文脈で承認は二者関係として抽象化される（「二つの異なる行為主体」(QL50)、「われわれ二つの自由の結びつけられた努力」(QL68)等）。この抽象化された記述を、関係性そのものの収斂として理解し、現実化を試みた実践の例が後述の17世紀の文学にあたる。
- 17) サルトルの言葉では、承認関係が提示する理想、すなわち「目的の都市は、語のベルクソンの意味において閉じた社会である」(CM177)。結論を先取りすれば、抽象的に捉えられ実現される限りでは開放性を失う理想的共同性としての「目的の都市」を「具体的で開かれた社会に転換する」(QL273)こと、すなわち社会の抑圧を取り除くことで読者と作家の外延を限りなく拡大し、理想を「歴史化する *historialiser*」方向へと読者を導くことに、サルトルの提示する、文学を通じた倫理的実践の狙いがある。本稿の意見では、サルトル自身は以下でわれわれが提示する、理想と現実の緊張関係を読者に体験させるテキスト実践を通じて上記のことを試みる。
- 18) 理想を介して社会の改善を促す変革論が理想と現実の隔たりを強調する際、しばしば両者のあいだの差異が出発点となるが、そのとき隔たりが外的関係としてあらかじめ措定されるため、現実の側に身を置く者にとってはいかにして理想を引き受けるかが、また理想を選択する者にとってはその理想をいかに現実から遊離させないかが課題となる。一方、サルトルの場合には、現実から理想への移行をテキスト体験として生きさせつつ、さらにこの体験の挫折のなかから隔たりを引き出すことで問題を解消する。理想との隔たりを生きられたものにする第二章のテキスト実践は、第三章以降みられる現状分析および未来への提言の豊かさと鋭さを支える効果をもつ。

L'éthique au-delà de l'idée et du réel : sens théorique de la reconnaissance dans *Qu'est-ce que la littérature?*

Shintaro AKASAKA

Dans son ouvrage intitulé *Qu'est-ce que la littérature?* paru en 1948, Jean-Paul Sartre présente la théorie de la reconnaissance entre l'écrivain et son lecteur comme une relation éthique et idéale.

Le but de cet article est d'analyser le rôle théorique de cette relation dans la première éthique de Sartre. Nous allons voir que la structure sartrienne du rapport entre l'écrivain et son lecteur ne correspond pas à la réalité, mais révèle au lecteur du texte l'impossibilité de la reconnaissance dans la situation actuelle. Cet échec de la reconnaissance permet au lecteur de désirer la société idéale et de conduire moralement.